

北蟻越遺跡（第2次）・津賀古墳群 発掘調査報告

—鈴鹿市津賀町所在—

2000・12

三重県埋蔵文化財センター

序

鈴鹿市は、伊勢国府や伊勢国分寺が築かれるなど、古くから伊勢国を中心として栄えてきました。また、近畿地方と東海地方とを結ぶ交通の要衝としての役割を果たしてきたところでもあります。今回発掘調査を行いました北蟻越遺跡は、伊勢国府跡である長者屋敷遺跡から東方約1kmに位置する遺跡であり、当地域の歴史を解明するうえで貴重な遺跡といえます。

北蟻越遺跡は平成10年度に第1次調査が行われ、古墳時代前期・中期の住居跡が見つかっています。今回の第2次調査では、開墾・耕作により墳丘は削平されていましたが、7基の古墳の周溝が見つかりました。周辺には現在古墳の高まりを見つけることは出来ませんが、周辺にはさらに多くの古墳が眠っていると考えられます。

今回の発掘調査は、道路の改良工事によって現状保存が困難になった部分について調査したもので、発掘調査からはいくつかの歴史を解明する情報を得ることができます、貴重な文化財は消えてしまうこととなります。記録保存というかたちで残したこの報告書が当地域の歴史の解明に活用され、今後の文化財保護に役立てれば幸いです。

なお、発掘調査に際しましては、地元の方々をはじめ、鈴鹿市教育委員会、鈴鹿市考古博物館、県土整備部道路整備課、北勢県民局鈴鹿建設部、及び財団法人三重県農業開発公社など、多くの方々から多大な御協力と暖かいご配慮をいただきました。文末ではありますが、心から感謝申し上げます。

平成12年12月

三重県埋蔵文化財センター

所長 藤澤英三

例　　言

- 1 本書は、三重県鈴鹿市津賀町字南山1地内に所在する北蟻越（きたありこし）遺跡（第2次調査）・津賀古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 この発掘調査は、平成11年度一般地方道辺法寺加佐登停車場線緊急地方道路整備事業に伴い実施したものである。
- 3 現地での調査は平成11年度に行った。調査体制は以下の通りである。
調査主体　三重県教育委員会
調査担当　三重県埋蔵文化財センター
　　調査第一課 技師 水谷　　豊
　　資料普及グループ 研修員 打田久美子
土工担当　財団法人三重県農業開発公社
- 4 当報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構・遺物の写真撮影、執筆及び全体の編集は水谷が行った。鉄製品については、（財）元興寺文化財研究所の撮影による。
- 5 調査にあたっては、鈴鹿市教育委員会、鈴鹿市考古博物館、県土整備部道路整備課、北勢県民局鈴鹿建設部、及び地元の方々から多大な協力を得た。また、土地所有者である近藤芳江氏からは、調査に際し様々な便宜をはかっていただいた。
- 6 当報告書の挿図の方位は、全て国土地標第VI系に属する座標北で示している。なお、磁北は西偏6°40'（平成10年）である。
- 7 当報告書での遺構は、通番となっている。番号の頭には以下の略記号を付けた。なお、番号は第1次調査とは無関係である。
S D……溝　　S K……土坑　　S X……古墳周溝
- 8 本書で報告した出土遺物や写真、図面などは三重県埋蔵文化財センターにて保管している。
- 9 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前言	(1)
1 調査の契機	(1)
2 調査の経過	(1)
3 調査の方法	(2)
4 津賀古墳群の名称について	(2)
II 位置と環境	(3)
III 調査の成果	(8)
1 調査区の層位	(8)
2 遺構	(8)
3 遺物	(14)
IV 結語	(16)
1 北蟻越遺跡について	(16)
2 津賀古墳群について	(16)
3 U字型鐵劍先について	(16)
4 今後の課題	(17)

挿図目次

第1図 北蟻越遺跡周辺の遺跡	(2)
第2図 調査区周辺地形図	(4)
第3図 調査区位置図	(4)
第4図 調査区遺構平面図	(5・6)
第5図 調査区土層断面図	(7)
第6図 SX 3、SX 13平面図・土層断面図	(9)
第7図 SX 3 遺物出土状況図	(10)
第8図 SX 4 平面図・土層断面図	(10)
第9図 SX 5 平面図・土層断面図・出土状況図	(11)
第10図 SX 6 平面図・土層断面図	(12)
第11図 SD 7・8 平面図・土層断面図	(13)
第12図 SX 12平面図・土層断面図	(13)
第13図 遺物実測図	(15)

表目次

第1表 遺構一覧表	(14)
第2表 遺物観察表	(15)

図版目次

図版1 調査区全景（西から）／調査区全景（東から）	(18)
図版2 SX 3（北から）／SX 3（東から）	(19)
図版3 SX 3 拡張後（南から）／SX 3・SX 13（西から）	(20)
図版4 SX 3（SD 1）鉄製品出土状況／SX 3（SD 2）鉄製品出土状況／SX 5 土器出土状況／SX 5 土器出土状況／SX 4（北から）	(21)
図版5 SX 5（北から）／SX 5（東から）	(22)
図版6 SX 6（北から）／SX 6（東から）	(23)
図版7 SD 7・8（東から）／作業風景（南から）	(24)
図版8 西側拡張部（東から）／東側拡張部（西から）	(25)
図版9 SX 12（北から）／SX 12（東から）	(26)
図版10 出土遺物	(27)

I 前 言

1 調査の契機

北越遺跡は、鈴鹿市庄野町～津賀町に広がる周知の遺跡で、現況は畑作や苗木栽培、酪農が行われているところである。周辺には鈴鹿市の市街地と東名阪自動車道鈴鹿I・Cを結ぶ交通路として機能している路線が少なく、交通に支障を来してきたため、一般地方道辺法寺加佐登停車場線緊急地方道路整備事業が行われることとなった。

これを受け三重県埋蔵文化財センターでは、平成7年7月と平成10年3月に試掘調査を行った。その結果、事業地内に遺構・遺物の存在が明らかとなり、協議の結果、現状保存困難なところについて本調査を行うこととなった。

本調査は平成10年度に2,900m²について第1次調査が行われており⁽¹⁾、今回は第2次調査である。

2 調査の経過

a 調査経過の概要

今回の発掘調査区は第1次調査区の北西にある。平成10年3月に行われた試掘調査では、溝・ピットなどの遺構や土師器片が確認され、2,500m²が本調査されることとなった。

調査は平成11年7月5日から重機による表土掘削を行い、12日から人力掘削を開始した。調査開始後、当初は削平により遺構が存在しないと思われた範囲にも遺跡の広がることが予想されたため、写真撮影終了後、西側で2m×18m、東側で2m×25mのトレチ調査を行った。その結果、西側では遺構・遺物とも確認されなかつたが、東側で溝を検出したため、新たに120m²の調査を行った。現地調査は9月17日に終了し、最終的な面積は2,700m²であった。

発掘作業は、作業員各位の熱意と暖かいご配慮により無事終了することができた。ここに御名前を記し、感謝いたします。

伊藤和代、伊藤玉子、打田麗子、江藤絢子

小河清角、小河茂、勝野春男、川北昭二

久保田達美、桑原うた子、杉本正雄、鈴木義孝

田中貞夫、田中重治、田中八重子、辻宏

生川五十男、堀之内一哉、松村幸雄、水野豊
村居典子、酒井巳紀子、北角光津子

b 調査日誌（抄）

- 6月15日 現地協議。
6月28日 現場事務所設置。道具搬入。
7月5日 重機による表土剥ぎ開始。
7月12日 人力掘削作業開始。古墳の周溝と思われる溝を検出。
7月14日 午後より作業。S X 3は西側2条、北側1条の周溝となり、調査区外へ延びる。
7月15日 遺構掘削開始。S X 3溝から鍬鋤先と思われる鉄製品出土。
7月21日 S X 5からまとまって土師器・須恵器が出土。
7月23日 4基目の周溝検出。今度は円墳か。
7月24日 S X 6は溝幅約2.4mの円墳になる模様。
遺構は調査区の南側に集中し、北側は搅乱が多い。
7月27日 S X 6掘削開始。思ったよりも浅く、遺物出土せず。大雨のため午後中止。
8月2日 S X 6掘削。遺物ほとんど出土せず。上層は根が多く、耕作上がり込んでいると思われる。
8月12日 溝2条検出。周溝の名残か。他は風倒木や根の跡ばかり。
8月18日 作業再開。S X 3の東側の続きを拡張。北と東が1条、南と西が2条の溝になると判明。
8月19日 S X 3はコーナー部分が風倒木などにより搅乱され、溝の切り合い不明。東側で南北に直線に伸びる溝確認。
8月24日 調査区内清掃。乾燥し、表面しかきれいにできず。
8月25日 午前清掃。午後から写真撮影（スカイマスター）。
- 8月27日 東西でトレチ調査開始。東のトレチで溝を検出。拡張。実測開始（山口）。

8月30日 拡張部より周溝と思われる溝確認。掘削。

清掃・写真。

9月1～8日 遺構実測図作成（水谷、打田、杉崎、山口、豊田、北角、酒井）。トレンチ調査。

9月8日 実測完了。調査区拡張。

9月10日 拡張部遺構掘削。写真撮影。

9月17日 実測図、等高線図作製終了。

c 文化財保護法等にかかる諸通知

文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官あてに行っている。

・法57条の3 第1項（文化庁長官あて）

平成10年6月8日付道整第148号（県知事通知）

・法98条の2 第1項（文化庁長官あて）

平成11年5月14日付教生第601号（県教育長報告）

・遺失物法にかかる文化財発見認定通知（鈴鹿警察署長あて）

平成11年11月22日付教生第4-31号（県教育長通知）

3 調査の方法

a 小地区の設定について

今回の調査では、調査区内を4m四方の枠目で切ることによって国土座標および第一次調査とは無関係に小地区を設定した。しかし、報告する遺構は溝であり、複数の小地区にわたって存在しているため、報告書内では使用していない。

b 遺構図面について

調査区の平面図は1/20で作成している。また、古墳周溝については1/40の平面図を用いて等高線図を作成している。遺物の出土状況については個別に1/10の実測図を作成している。

4 津賀古墳群の名称について

今回の調査で確認された古墳の周溝は、鈴鹿市と協議の結果、津賀古墳群の一部と判断した。そのため、新たに「津賀23～29号墳」（市遺跡番号1300～1306）の名称を付けた。

註

（1）城吉基、新名強『北蠻越遺跡（第1次）津賀2号墳』

（三重県埋蔵文化財センター、2000）



1 北蠻越遺跡 2 津賀古墳群 3 津賀平遺跡 4 居敷遺跡 5 能褒野王冢古墳 6 白鳥冢古墳

7 井田川茶臼山古墳 8 名越古墳群 9 矢下古墳群 10 僧現ノ下古墳群 11 茶臼冢古墳群

12 森下山古墳群 13 蟻越古墳群 14 居敷古墳群 15 坊主山古墳群 16 白鳥冢古墳群

17 加佐登古墳群 18 繩宮古墳群 19 石薬師東古墳群 20 長者星敷遺跡

第1図 北蠻越遺跡周辺の遺跡（国土地理院「鈴鹿山」「鈴鹿」より）

II 位置と環境

北蟻越遺跡（1）は、鈴鹿市庄野町字北蟻越から同市津賀町南山にかけて所在する周知の遺跡である。また、津賀古墳群は北蟻越遺跡の東部に位置する古墳群で、かつては20基以上を数える古墳群であったといわれている。しかし開墾・耕作により古墳は削平され、昭和39年の分布調査で確認された古墳は半壇を含めて6基⁽¹⁾、現在は平成10年度の発掘調査によって2号墳が消滅し、現状で古墳の姿を確認することはできない。

鈴鹿山脈を源とする鈴鹿川は、亀山市と鈴鹿市の市境付近で安楽川と合流する。北蟻越遺跡はこの合流点の北に位置し、調査区は鈴鹿市の平野部を一望できる台地東端、標高約46mに位置する。平野部との比高は約20mである。

北蟻越遺跡の発掘調査は、平成10年度に引き続いでの第2次調査である。周辺の歴史的環境の詳細については第1次調査のものを参照されたい⁽²⁾。

北蟻越遺跡第1次調査では、古墳時代前期の竪穴住居1棟、中期の竪穴住居3棟、時期不明の掘立柱建物などが見つかっている。古墳時代の集落は津賀平遺跡⁽³⁾（3）や居敷遺跡⁽⁴⁾（4）でも見つかっており、周辺に当該期の集落が広がっていたものと思われる。第1次調査では津賀2号墳（2）の発掘調査が同時に実行され、6世紀末～7世紀初頭に築造された、南北14m×東西12mの方墳で、主体部は横穴式石室であることがわかっている。

周辺に目を向けてみると、北蟻越遺跡を含む台地上には数多くの古墳が存在している。北勢地域最大の前方後円墳であり、ヤマトタケルの墓といわれる亀山市能褒野王塚古墳（5）や、県内最大の円墳である白鳥塚古墳（6）、金銅製の冠・鏡・太刀・馬具が出土した井田川茶臼山古墳⁽⁷⁾（7）等の存在は、この地域に強大な勢力を誇った集団が住んでいたことを示すものである。

北蟻越遺跡の所在する台地上には、小規模な古墳で作られた名越古墳群（8）、矢下古墳群（9）、椎現ノ下古墳群（10）、茶臼塚古墳群（11）、森下山古墳群（12）、蟻越古墳群（13）、居敷古墳群（14）、

坊主山古墳群（15）、白鳥塚古墳群（16）、加佐登古墳群（17）、綺宮古墳群（18）等が存在する。また谷を挟んで東の台地では、近年石薬師東古墳群（19）の調査が12次にわたって行われ、方墳を主体とする5世紀末から6世紀前葉の古墳群の様相が明らかになりつつある⁽⁸⁾。

註

（1）『鈴鹿市史』第1巻 1980

（2）城吉基・新名強『北蟻越遺跡（第1次）津賀2号墳』（三重県埋蔵文化財センター、2000）

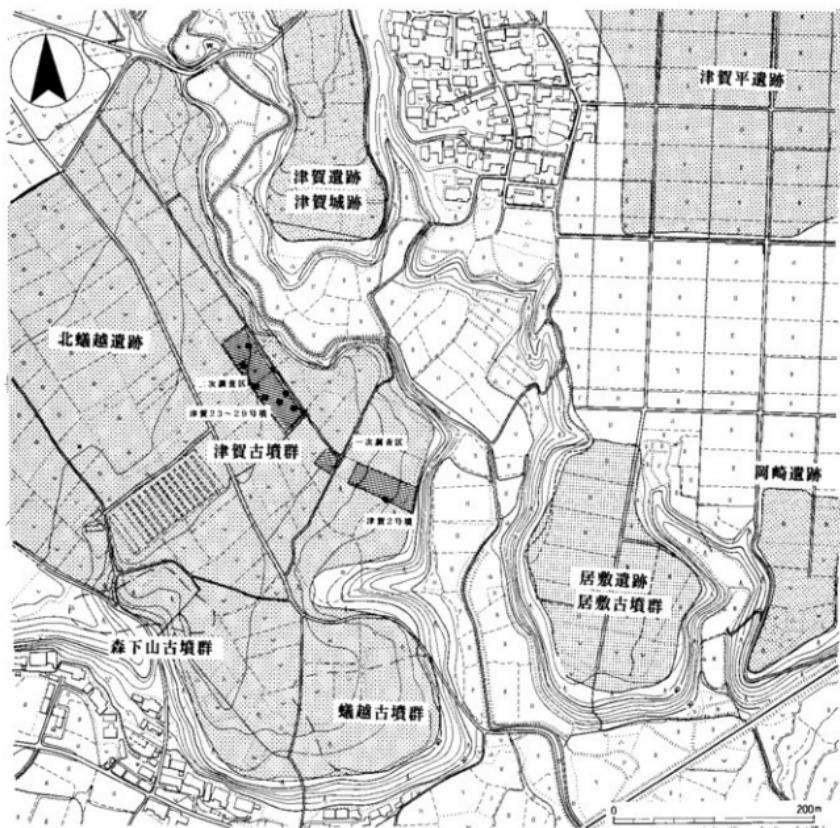
（3）『津賀平遺跡』（『鈴鹿市埋蔵文化財年報Ⅱ』鈴鹿市教育委員会、1995）など。

（4）伊藤裕偉『居敷遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996）

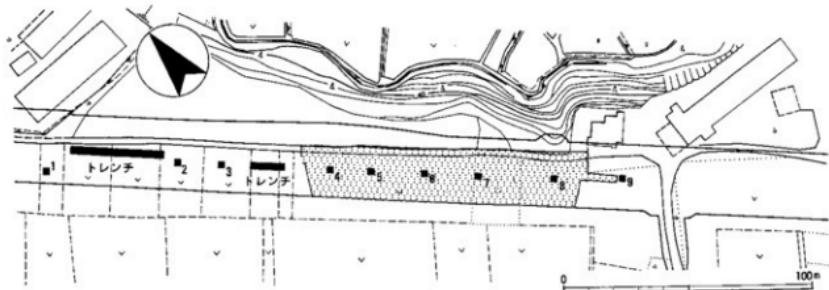
（5）小玉道明『井田川茶臼山古墳』（三重県教育委員会、1988）

（6）服部芳人、船越伸ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000）

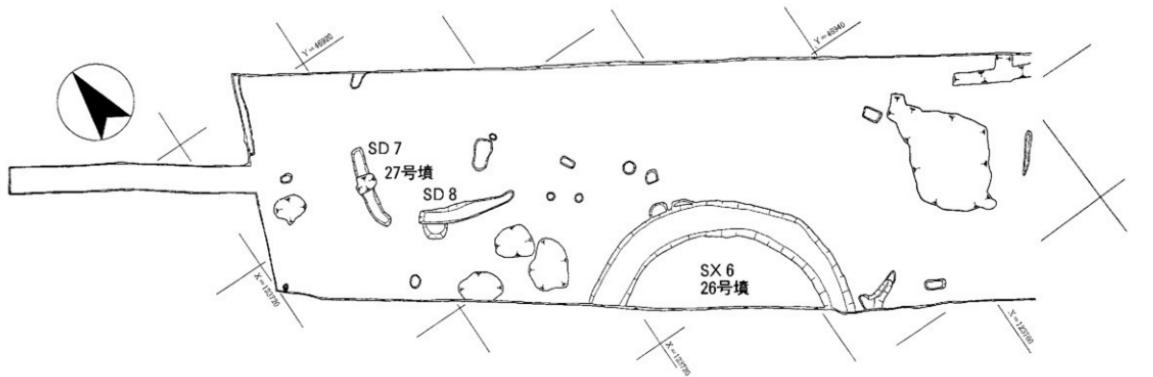
角正淳子『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡（第11次・第12次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000）など。



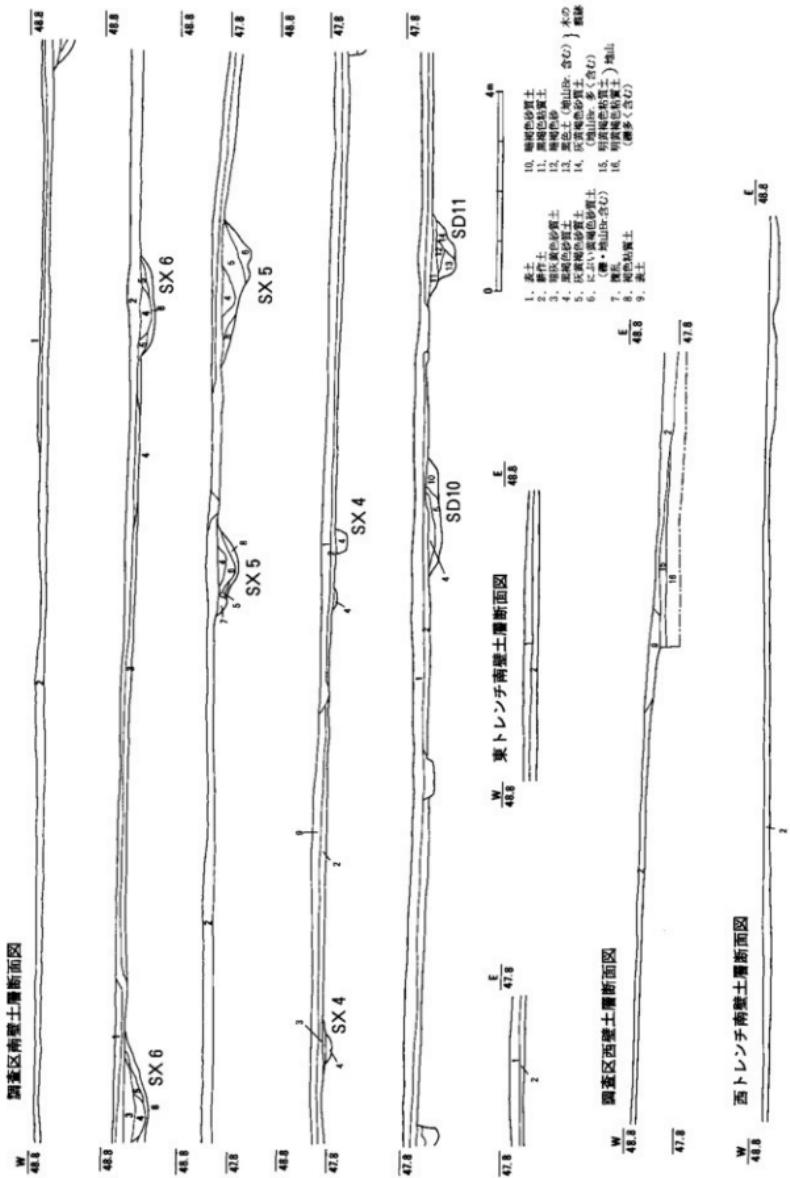
第2図 調査区周辺地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)



第4図 調査区遺構平面図 (1 : 250)



第5図 調査区土層断面図 (1 : 100)

III 調査の成果

1 調査区の層位

調査地は津賀町・広瀬町一帯に広がる台地の東端にあたり、東側は急激な崖となっている。周辺一帯には畠地が広がり、調査区内も同様である。調査区では開墾・耕作による削平により、地表面から0.2~0.3m程度で地山である明黄褐色~黃褐色の礫を含む粘質土となり、包含層は見られない。特に北・西側では削平が激しく、表土下で砂礫層に達するところもある。

調査区は東側の谷に向かい緩やかに傾斜している。遺構検出面は、西部で標高48.4m、東部で47.2mである。

2 遺構

今回の調査で確認できた遺構は、方形に巡る溝、その他の溝・土坑・ピットなどである。方形に巡る溝については、開墾・耕作によりかなり削平された状態で検出しておらず、埴丘盛土や埋葬施設は確認できなかったため明確に古墳の周溝とは断定できないものの、堅穴住居に見られる柱穴・カマドなどの施設が見られないこと、10m前後の規模を持つこと、台地周辺には多くの古墳が存在することなどから、古墳の周溝と判断した。

a 古墳周溝

S X 3 (23号墳) (第6図)

調査区東部に位置する方墳の周溝である。南側と西側は2条（内：SD 1・外：SD 2）、北側と東側は1条になる。コーナー部が擾乱されており、切り合いが不明なため、時期差を捉える事は出来なかつたが、拡張されたと考えるのが自然であろう。規模は内側では東西約10.0m×南北約9.5m、外側では東西約11.0m×南北約11.0mである。SD 1は幅約0.8m・深さ約0.3m、SD 2は幅約1.5m・深さ約0.4mで、南北の周溝の中央部がやや深く掘られ、東西の溝はやや浅い。全体に外側のSD 2のほうが深く掘られている。西側2条の溝から、それぞれ鉄製鍛錆先（4・5）が1点ずつ出土している（第7

図）。その他の出土遺物は須恵器・土師器の小破片のみで、時期は不明である。

S X 4 (24号墳) (第8図)

東西7.5m×南北8.0mの方墳である。削平が著しく、溝幅は約0.6~0.8m・深さは0.2m程度で、西溝は痕跡を残す程度の周溝である。遺物は出土していない。

S X 5 (25号墳) (第9図)

調査区のほぼ中央に位置する周溝である。規模は内法で東西9.0m×南北9.0mの方墳である。周溝幅は北溝は約2.0m、東・西溝は約1.5m、南溝は約1.2mである。深さは0.3~0.5mで、北東コーナー部がやや深く掘られている。東側の溝からは須恵器壺（1）、土師器壺（2）・高杯（3）が出土しているが、周溝底部からはかなり浮いた状態で出土していることから、原位置を保っていないものと思われる。5世紀中葉に築造された可能性がある。

S X 6 (26号墳) (第10図)

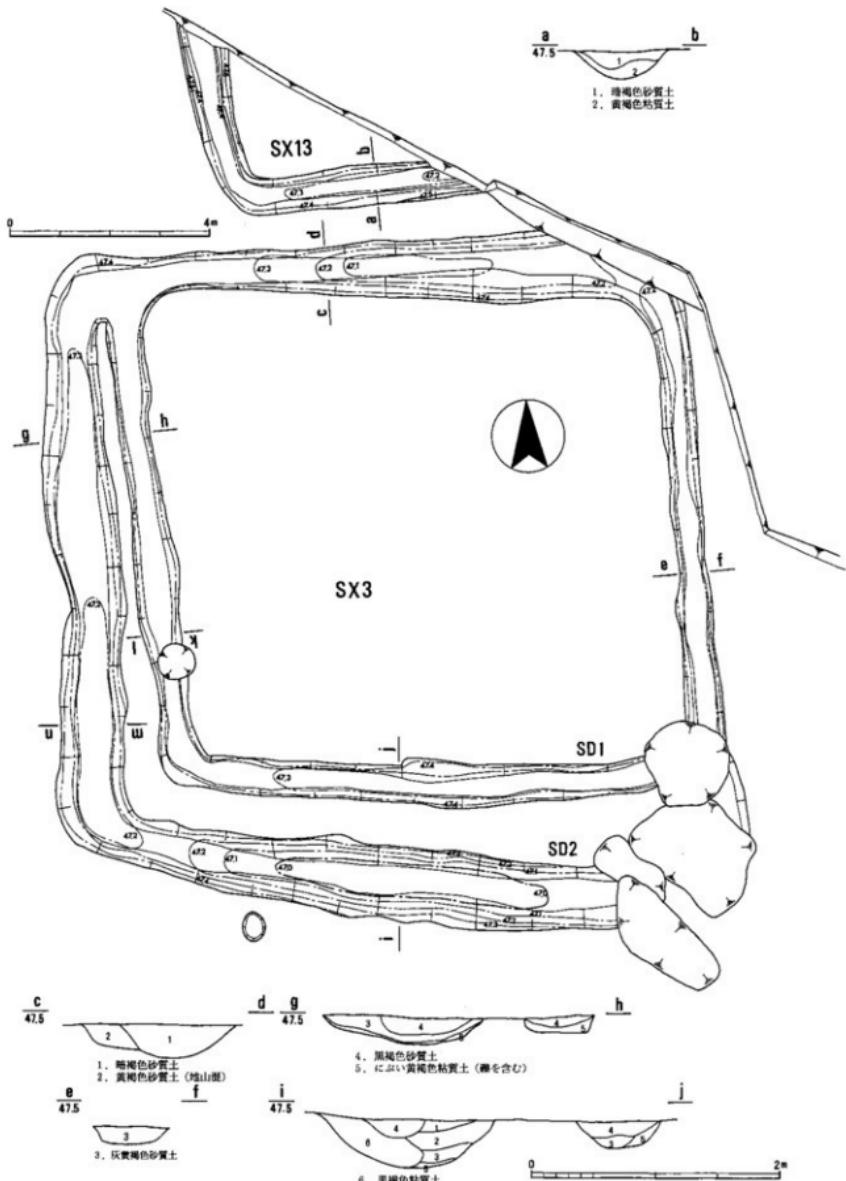
東半分を確認した、径約15m前後の円墳と推測される周溝であるが、調査区外に伸びるため、正確な規模は不明である。溝幅約2.0~2.5m・深さ約0.3mで、溝底は東側に緩やかに傾斜している。遺物は須恵器・土師器の小片が出土しているのみで、時期は不明である。

S D 7・8 (27号墳) (第11図)

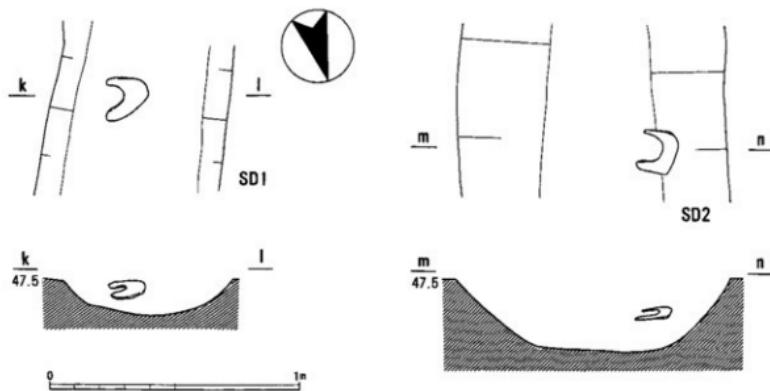
調査区西部で西・南の溝を確認した。東・北の溝は確認できなかったが、削平されたものと考えられるため、周溝の一部と判断した。検出段階では溝は途切れているものの、削平が激しいため本来途切れていたのか、浅く掘られていたのかは明確ではない。遺物は須恵器・土師器の小破片が出土したのみで、時期は不明である。

S X 12 (28号墳) (第12図)

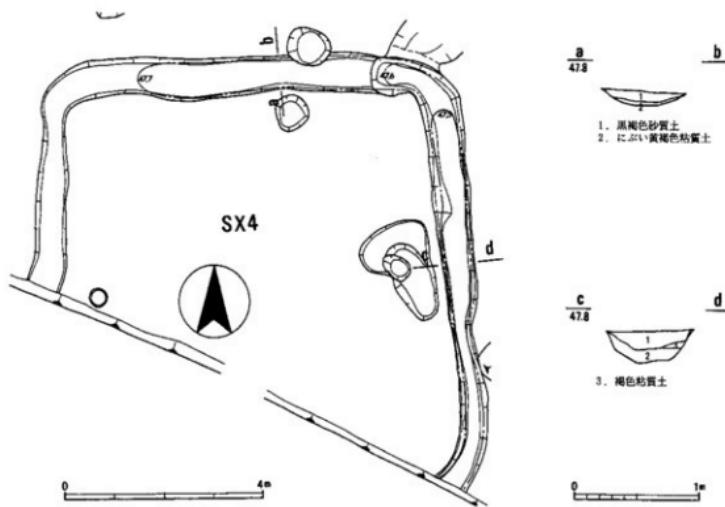
調査区の東拡張部で西・南・東の溝を確認した。規模は東西8.5m×南北9.0mの方墳である。北・東溝は擾乱のため一部しか残っていない。最も残りの良い西溝では幅約1.2m・深さ約0.4mである。削平を受けているが、周溝はコーナー部で途切れるか、



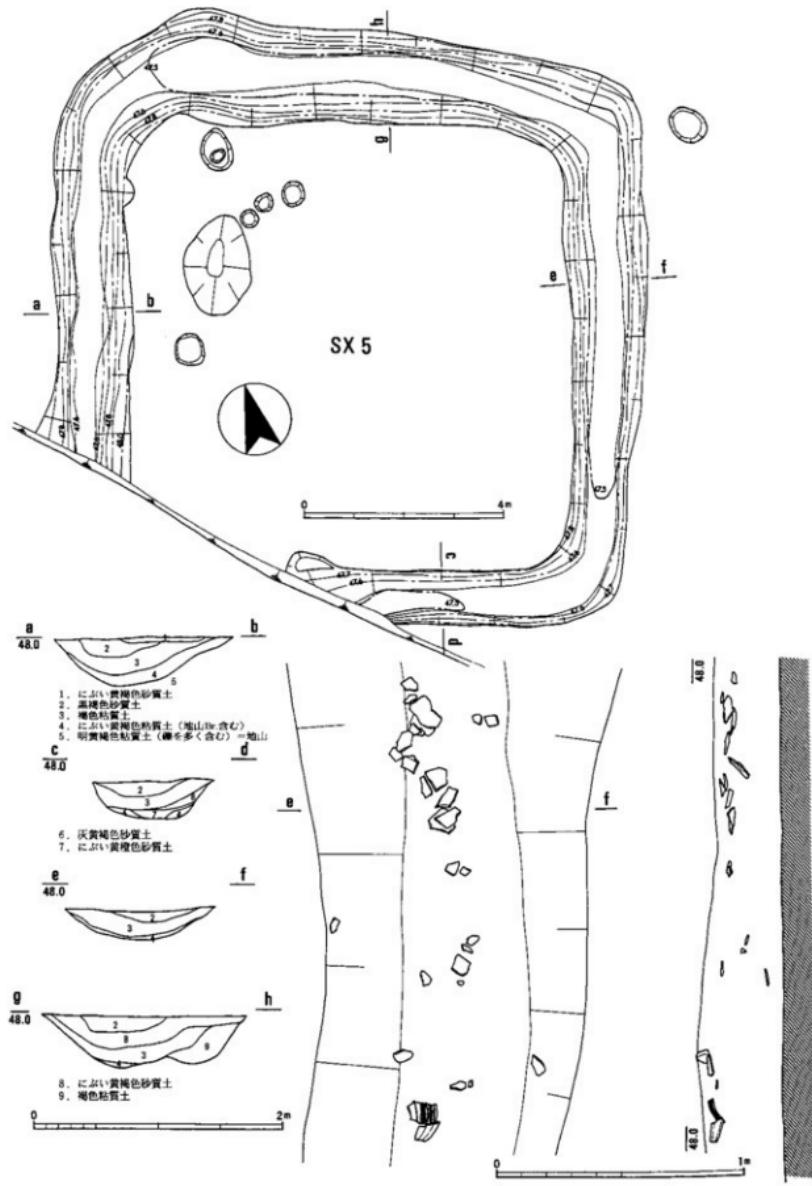
第6図 SX3、SX13平面図 (1 : 100)・土層断面図 (1 : 40)



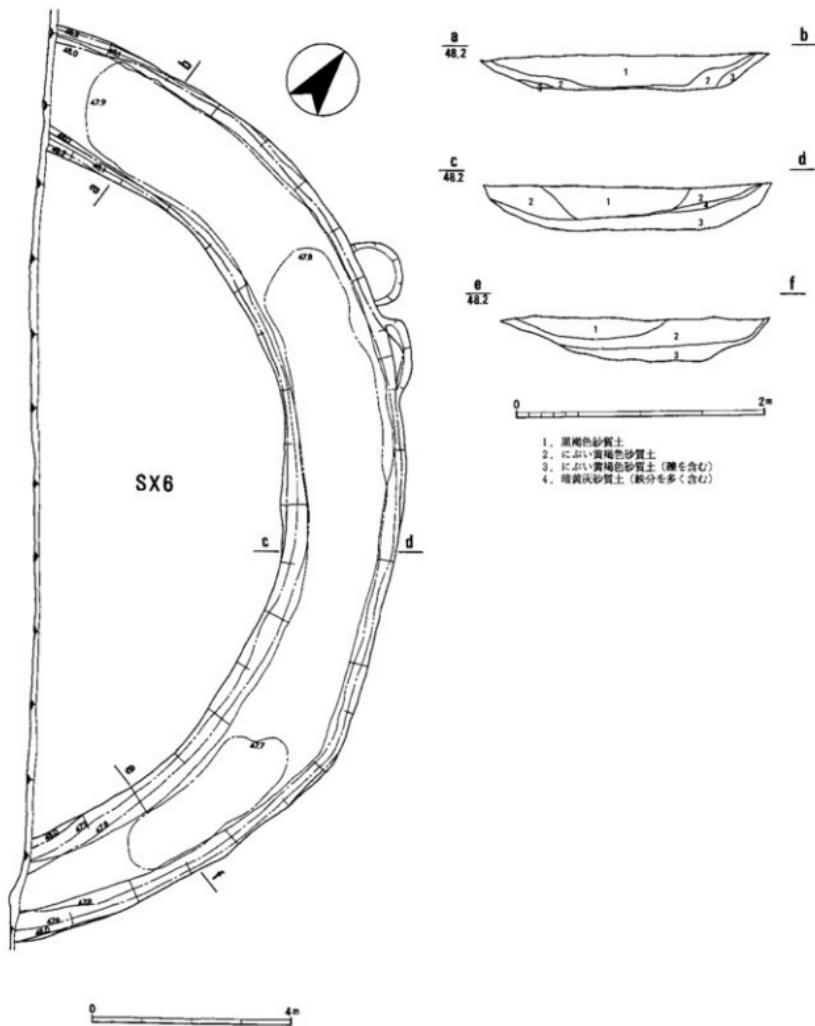
第7図 SX3遺物出土状況図 (1:20)



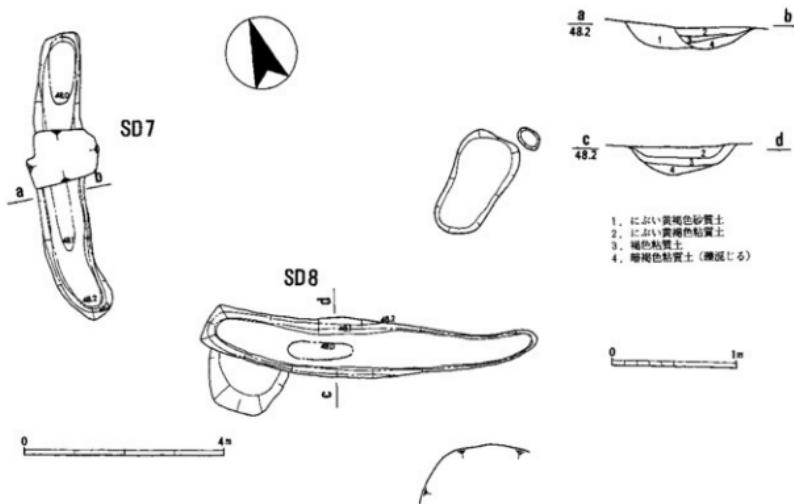
第8図 SX4平面図 (1:100)・土層断面図 (1:40)



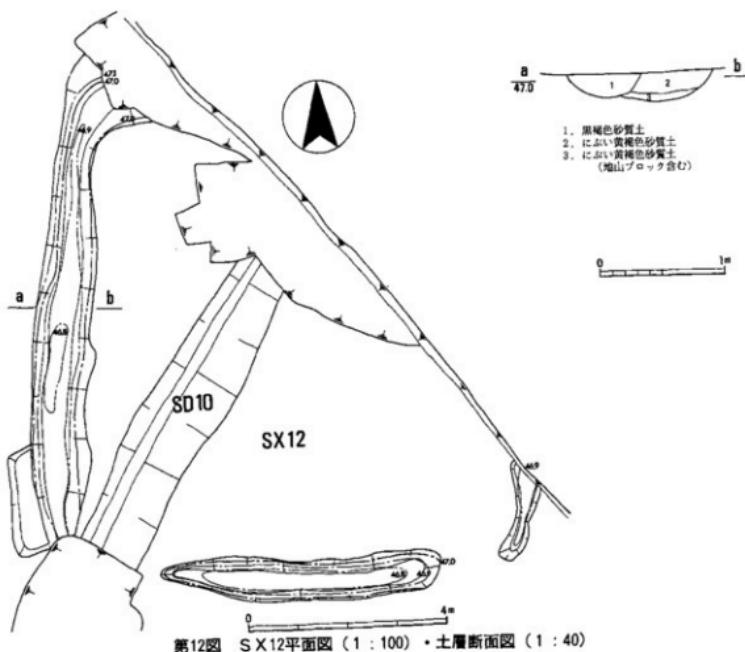
第9図 SX 5 平面図 (1:100)・土層断面図 (1:40)・出土状況図 (1:20)



第10図 S×6平面図(1:100)・土層断面図(1:40)



第11図 SD 7 + 8 平面図 (1 : 100) • 土層断面図 (1 : 40)



第12図 SX12平面図 (1 : 100) • 土層断面図 (1 : 40)

あるいは浅く掘られていたものと思われる。遺物は出土していない。

S X 13 (29号墳) (第6図)

S X 3 の北に位置する西・南の一部を確認した周溝であるが、調査区外に伸びるため、規模は不明である。溝幅は約0.8m・深さ約0.3mである。遺物は土師器・須恵器の小破片のみで、時期不明である。

b その他の遺構

S D 10 調査区の東方、S X 3 の東に位置する浅い溝である。埋土上層は耕作土であり、時期は須恵器小破片が出土しているのみで、詳細は不明である。

S D 11 調査区の東方、S X 12 を切っている溝である。幅広く深く掘られ、断面V字状を呈するなど、「区画」を意識して掘られた溝の可能性を考えられるが、周辺に遺構を伴わず、性格は不明である。遺物は出土せず、時期も不明である。

3 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱に4箱である。図示出来たものはS X 5 から出土した須恵器壺(1)、土師器壺(2)・高杯(3)と、S X 3 から出土した鉄製の鍔頭先2点(4・5)である。

S X 5 出土土器(1~3)

1は、S X 5 の東溝より出土した須恵器の壺である。口縁端部は非常にシャープな作りで、上下部が突出する。口頸部には2条の突帯が巡り、区画内にはそれぞれ波状文が施されている。体部上面にはタタキ目が見られる。田辺昭三氏の陶邑編年⁽¹⁾のT K216型式併行期と思われる。

古墳名	墳形	規模(m) (東西×南北)	周溝幅 (m)	周溝深 (m)	出土遺物	調査時 遺構番号	備考
23号墳	方墳	SD1:10.0×9.5 SD2:11.0×11.0	0.8 1.2~1.5	0.3 0.4	鉄製鍔頭先 鉄製鍔頭先	SX3(内溝SD1 外溝SD2)	SD2は甚張か。
24号墳	方墳	7.5×8.0	0.6~0.8	0.2	なし	SX4	
25号墳	方墳	9.0×9.0	1.2~2.0	0.5	須恵器壺 土師器壺、高杯	SX5	
26号墳	円墳	推定径15m	2.0~2.6	0.3	須恵器片 土師器片	SX6	
27号墳	方墳	不明	1.0~1.2	0.3	土師器片	SD7・8	
28号墳	方墳	8.5×9.0	1.0~1.2	0.4	なし	SX12	コーナー部途切れる?
29号墳	方墳	不明	0.8	0.3	須恵器片 土師器片	SX13	コーナー部途切れる?

第1表 遺構一覧表

2は土師器の直口壺。全体はナデ調整で、体部上面に横方向のミガキが見られる。

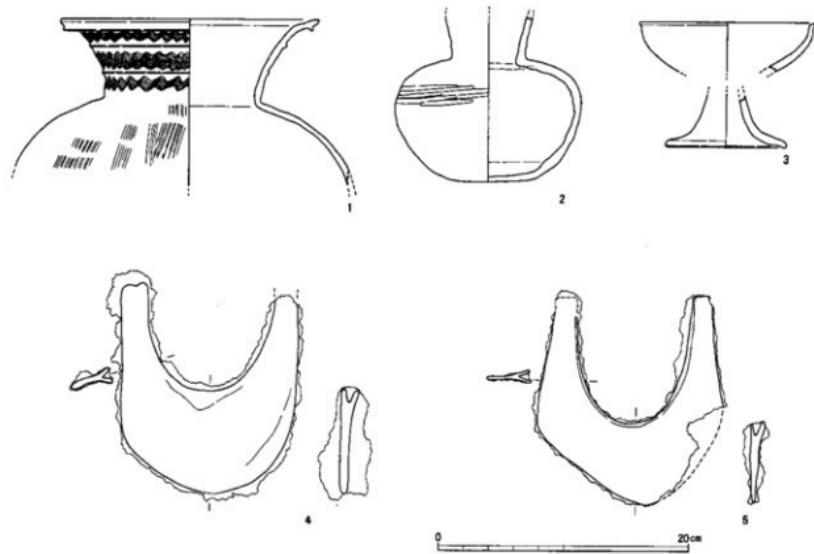
3は土師器の楕形の高杯である。接合はしないものの、同一個体と思われる。全体にナデ調整が見られ、口縁部周辺は幅広くヨコナデされ、やや屈曲している。

S X 3 (23号墳) 出土鉄製品(4・5)

4が内側のSD 1から、5が外側のSD 2から出土している。ともに、北溝の西溝とのコーナー部に近いところから出土している。「U字形鍔・鍔先」と呼ばれるものである。ともに、断面は鉄板を折り曲げて、Y字状に作られている。4は側面がほぼ平行に直線的であるが、5は内向している。また、5は刃先がいびつな形をしているが、使用により摩滅しているものと思われる。

註

(1) 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981)



第13図 遺物実測図 (1 : 4)

番号	実測番号	器種等	遺構名	計測値(cm)	調整・技法の特徴など	胎土	焼成	色調	残存度	特記事項
1	001-01	須恵器 壺	SX5	口径 21.0	外:タガキ、回転ナデ、波状文 内:ナデ、回転ナデ	密	並	灰	口縁部 3/4	
2	002-01	土師器 壺	SX5	体部最大径 15.0 器高	外:ミガキ、ナデ、ヨコナデ 内:オサエ、ナデ	やや	並	橙	体部完 存	調整不明瞭
3	002-02	土師器 高杯	SX5	口径 14.0	ナデ、ヨコナデ	密	並	橙	口縁部 1/4	一部剥離、 調整不明瞭
4	003-01	鉄製品 鍔銅先	SD1	刃幅 9.4 厚さ 0.7					完存	刃先摩滅
5	003-02	鉄製品 鍔銅先	SD2	刃幅 7.0 厚さ 0.7					刀部一 部欠損	使用による 摩滅著しい

第2表 遺物観察表

IV 結語

1 北越遺跡について

北越遺跡第1次調査⁽¹⁾では、古墳時代前期の堅穴住居1棟、中期の堅穴住居3棟、時期不明の掘立柱建物1棟及び土坑が確認されている。また、中期の堅穴住居からは赤色顔料を多量に入れた土器器の壺が見つかっている。今回の調査区からは、第1次調査のような集落跡と考えられる遺構は確認できなかった。墓域として利用されていたのであろう。

2 津賀古墳群について

津賀古墳群はかつては20基を超える古墳群であった⁽²⁾。しかし、昭和39年の分布調査で確認された古墳は、半壇のものを含めわずか6基であり、現在は平成11年度に津賀2号墳が発掘調査された結果、その南の3号墳が残るのみとなつた。

今回の発掘調査によって見つかった7基の古墳は、第1次調査B地区が削平のため遺構が見られなかつたため、つながりは不明であるが、津賀古墳群と一連のものと思われる。

第1次調査で発掘調査された結果、津賀2号墳は東西12m×南北14mの方墳で、横穴式石室を持つことが確認された。出土した遺物は須恵器の他、鉄鎌・鉄釘・馬具などが見つかっている。出土した須恵器から、6世紀末～7世紀初頭の築造と考えられる。

今回の発掘調査からは遺物はほとんど出土していない。唯一土器がまとまって出土したSX5からは5世紀中頃に比定される、田辺編年T K216型式併行⁽³⁾と考えられる須恵器広口壺が出土しているが、周溝底部から浮いた状態で出土しており、原位置を保っていない可能性が高い。他の古墳に関しては遺物が小破片のみの出土であるため、時期は不明である。そのため明確にはいえないものの、少なくとも5世紀中頃には小規模な古墳が築かれ始めたものと思われる。津賀2号墳と今回の調査区の間には、古墳の周溝は確認されていないが、昭和39年作製の埋蔵文化財包蔵地カードには今回の調査区に古図を参考にした古墳の位置がスケッチがされており、津賀古墳群として捉えられるものと思われる。

見つかった周溝は6基が方墳で1基が円墳であり、津賀古墳群は1辺10m前後の方墳を主体とした古墳群であったと思われる。周溝はそれぞれ方向をほぼ同じくし、それぞれに切り合い関係も見られないことから、一定の規制の下に連続して築かれたものと推察される。1基のみ見つかった円墳は他の方墳よりも規模が大きいが、これが埋葬者の階級差によるものか、時期差によるものかは判断できない。ただ、方墳が主体を占め、規模の大きな円墳が築かれるという古墳群の在り方は、当遺跡東方約5kmに所在する石薬師東古墳群の在り方と一致しており⁽⁴⁾、鈴鹿川中流域を特徴づける事例の可能性もある。

周溝内からほとんど遺物が出土しなかったことは、津賀古墳群の特徴といえよう。例えば前述した石薬師東古墳群では、周溝内から多量の埴輪・須恵器・土師器の出土が見られ、周溝内祭祀の存在が指摘されている⁽⁵⁾。石薬師東古墳群においても津賀古墳群と同様に周溝はかなり削平されており、残存状態は悪い。にもかかわらず、これだけの差がうまれたのは、もともと津賀古墳群では土器埋納を伴うような周溝祭祀が行われなかつたものと思われる。これが被葬者の階級差によるものなのか、他に起因するもののかは今後の検討課題といえよう。

第1次調査では、古墳時代前期の堅穴住居1棟、中期の堅穴住居が3棟見つかっており、また当遺跡の北東に位置する津賀平遺跡では古墳時代前期～後期にかけての集落跡が⁽⁶⁾、南東の居敷遺跡では古墳時代前期の堅穴住居が見つかっている⁽⁷⁾。これらの集落と周辺に多く見られる古墳群についての関連も考えていく必要があろう。

3 U字型鍬鋏先について

今回出土したU字型鍬鋏先は、三重県内では10・11例目となる。県内の発見例については『西岡古墳発掘調査報告』の中で中村光司氏が検討されており⁽⁸⁾、それを参考にして今回の発見例を考えてみたい。

今回出土したU字型鍬鋏先は、銹化しているもの

「鉄板折り曲げ鍛接技法」であると思われる。形状は4は「U」に近い形状をしているものの、5は鋒のため観察は困難であるが、歪みが認められ、使用により摩滅していると思われる。

時期的なものを考えると、残念ながら共伴遺物は小破片しかなく、不明といわざるを得ない。三重県内の他の出土例からは、5世紀中葉～6世紀後半まで報告されており、全国的な事例を見ても、U字形鍛鋒先は5世紀中葉を画期として方形鍛鋒先に加えて出現している^(*)。

出土状況からは、2条の溝の同じ南西のコーナー部からそれぞれ1点ずつ出土するという意味ありげな出土をしているが、その性格は不明である。周溝内から出土している類似例としては、伊勢市落合10号墳で、2条に分かれた溝の外側から単独で出土している^(**)。

観察からは、刃先が摩耗していることから、周溝掘削時に使用された刃先が埋納された可能性が考えられる。西岡古墳出土例は刃先がねじれ、明らかに使用後埋納された状況を示している^(***)。古墳から出土する使用痕の見られる鉄製品について、田中新史氏は、「使用具の埋納」の可能性を示唆されており^(****)、今回の発見例もそれぞれの周溝を掘削するのに使用した鍛鋒先を、周溝に埋納したものと考えたい。

4 今後の課題

発掘調査の結果、調査区には第1次調査で見られたような集落跡が見られず、当調査区にまで津賀古墳群が広がることが明らかになった。調査区は丘陵の東端に当たり、古墳群は西に広がっていると思われるが、開墾や耕作により、現状では、周辺で墳丘状の高まりを確認する事は出来ない。周辺の丘陵上に数多く存在する古墳と周辺の集落、また後に同一丘陵に築かれる伊勢国府との関係について、考える一つの資料となるであろう。

註

- (1) 城吉基・新名強『北蠣越遺跡（第1次）津賀2号墳』（三重県埋蔵文化財センター、2000）
- (2)『鈴鹿市史』第1巻 1980
- (3) 田辯昭三『須恵器大成』（角川書店、1981）
- (4) 服部芳人・船越重信ほか『石薬師東古墳群・石薬師東遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、2000）
- (5) 服部芳人「古墳周溝内における遺物出土状況について—石薬師東古墳群の例から—」（『研究紀要』第8号、三重県埋蔵文化財センター、1999）
服部芳人「鈴鹿川流域の群集墳の一例 石薬師東古墳群の概要」（『Mie History』vo 1.10 三重歴史文化研究会、1999）
- (6) 「津賀平遺跡」（『鈴鹿市埋蔵文化財年報』鈴鹿市教育委員会、1995）
- (7) 伊藤裕偉『屋敷遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1996）
『速報展発掘された鈴鹿1999』（鈴鹿市考古博物館、2000）
- (8) 中村光司『西岡古墳発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1995）
- (9) 都出比呂志『農具鉄器化の諸段階』（『日本農耕社会の成立過程』岩波書店、1987）
- (10) 伊藤裕偉『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告－第7分冊－落合古墳群』（三重県埋蔵文化財センター、1992）
- (11) 前掲（8）
- (12) 田中新史「使用具の古墳埋納（上）」（『古代』第98号、早稲田大学考古学会、1994）
田中新史「使用具の古墳埋納（下）」（『古代』第100号、早稲田大学考古学会、1995）

図版 1



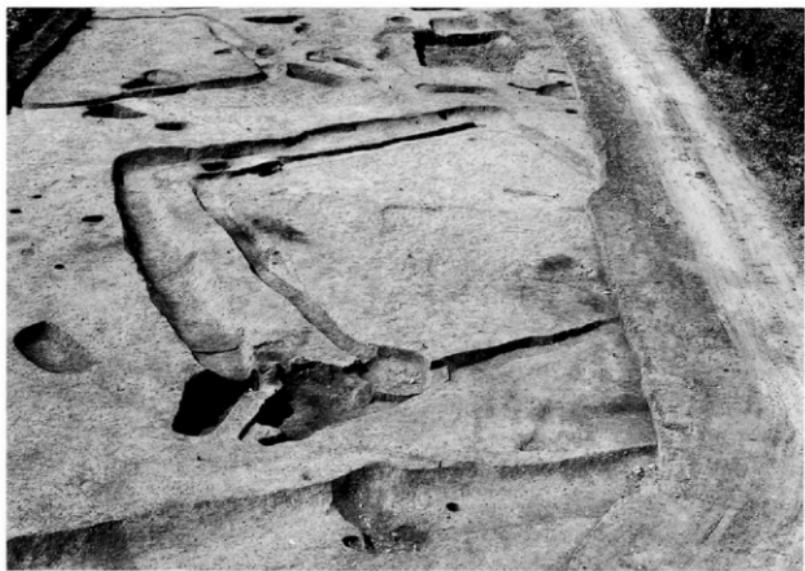
調査区全景（西から）



調査区全景（東から）



S X 3 (北から)



S X 3 (東から)

図版 3



S X 3 拡張後（南から）



S X 3・S X 13（西から）



SD 1 鉄製品出土状況（北から）



SX 5 土器出土状況（南から）



SD 2 鉄製品出土状況（北から）



SX 5 土器出土状況（東から）



SX 4 (北から)

図版 5



S X 5 (北から)



S X 5 (東から)



S X 6 (北から)



S X 6 (東から)

図版 7



SD 7・8 (東から)



作業風景 (南から)

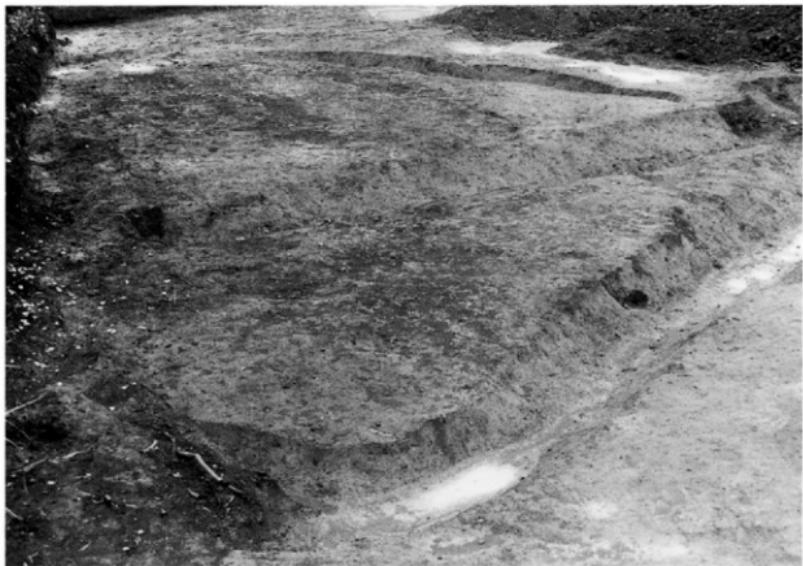


西側拡張部（東から）



東側拡張部（西から）

図版 9



S X12 (北から)



S X12 (東から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きたありこいせき(だい2ビ)・つがこふんぐんはくくつちょうさほうこく							
書名	北蟻越遺跡(第2次)・津賀古墳群発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告216							
シリーズ番号								
編著者名	水谷 豊							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732							
発行年月日	2000年12月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きたありこい し 北蟻越遺跡 (第2次) つがこふんぐん 津賀古墳群 23~29号墳	みえけん鈴鹿市 つがちょうあわら市 津賀町字南山	24207	521 1300~ 1306	34° 52' 53"	136 30' 49"	1999.7.5 ~9.17	2,700 m ²	平成11年度一般地方道沿辺法寺加佐登停車場線緊急地方道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
北蟻越遺跡 (第2次) 津賀古墳群 23~29号墳	古墳	古墳時代	古墳周溝 7基 方墳6基 円墳1基	須恵器壺 土師器壺 高杯 U字型鍬鋏先 2点	津賀古墳群の一部(23~29号墳)の発掘調査。 5世紀中頃の須恵器が周溝内から出土。 鍬鋏先が2条の周溝から1点ずつ出土。			

平成12(2000)年12月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年10月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財発掘調査報告216

北蟻越遺跡（第2次）・津賀古墳群発掘調査報告

2000年12月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印 刷 伊藤印刷株式会社
